

教 育 研 究 業 績 書		
2019年5月1日		
氏名 金敷 大之 印		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
社会心理学, 認知心理学, 実験心理学	行為, 実行機能, プラン, メタ認知, モニタリング	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書, 教材		
『新しく学ぶ心理学』(共著)	2004年1月30日	研究業績「著書」を参照
『認知心理学基礎実験入門』(共著)	2008年5月7日	研究業績「著書」を参照
『図説 教養心理学』(共著, 編者)	2011年3月15日	研究業績「著書」を参照
『認知心理学の冒険—認知心理学の視点から日常生活を捉える』(共著)	2013年5月20日	研究業績「著書」を参照
『図説 教養心理学(増補第2版)』(共著, 編者)	2016年4月1日	研究業績「著書」を参照
3 教育上の能力に関する大学等の評価		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
5 その他		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 資格, 免許		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
ワークショップ「心のロコモ予防I—もの忘れと上手につきあうコツ—」甲子園大学市民公開講座, 於 甲子園大学 上野大介・金敷大之・金綱知征	2016年3月10日	運動機能の低下に伴うロコモティブ・シンドローム予防のためのワークショップを行った。(金敷の担当: ワークショップの企画, ファシリテーター担当)
講演「記憶術で頭の活性化を」甲子園大学市民公開講座, 於 甲子園大学	2016年3月14日	記憶術のイメージ法や場所法など, 覚えるべき情報と関連づける情報との結びつけ方を実際に受講者に行ってもらった形の講演を行った。
講演「不思議現象と社会心理学」甲子園大学心理学部公開講座, 於 甲子園大学	2016年8月8日	超常現象や, 神秘体験などが, どのように人の心の中で生じ, どのように意味づけられるかを講演し, 非科学的ではあるが人の心理にとっての意味を考察した。
講演「超高齢社会における『使いやすさ』の心理学」甲子園大学心理学部公開講座, 於 宝塚市男女共同参画センター	2016年10月2日	超高齢社会におけるハリノノリーマンユニバーサルデザインの考え方に基づいて, 日常生活物品の使いやすさ, および電子機器の使いやすさについて講演した。
パネリスト「認知症予防を考える」講演会パネルディスカッション, 甲子園大学・宝塚市 地域連携推進事業, 於 宝塚市立東公民館	2017年3月5日	認知症予防について, 心理学の観点からパネリストとして講演を行った。メタ認知, という自分自身の技量を推論する能力についての話題を提供した。

講演「コントロール感とは？」甲子園大学市民公開講座、於 甲子園大学	2018年3月8日	精神的健康に関係するコントロール感について、内的・外的の意味を交えながら講演した。		
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
1 新しく学ぶ心理学 著者：野村幸正・金敷大之・森田泰介	共著	2004年1月30日	二瓶社	教養教育における教科書として位置づけられた心理学の著書である。共著者として、全10章のうち、第2章「処理洋式の進化」(pp. 27-43)、第4章「心の深層—フロイト」(pp. 69-88)、第6章「文化—人間の特殊性」(pp. 111-126)、第7章「個の総和以上のものをもつ集団」(pp. 127-142)、第9章「適応の根源としての知能、そして智慧」(pp. 157-179)を分担執筆した。
2 認知心理学基礎実験入門 著者：兵藤宗吉・須藤智(編著)、安永正史・中山友則・浅野昭祐・鈴木宏幸・金敷大之	共著	2008年5月7日	八千代出版	心理学の実験実習における教科書として位置づけられた心理学の著書である。全6章のうち、第4章「実験実習」の第8節「自己実演課題(SPTs)—ありありと思い出された情報はどこから来るのか—」(pp. 148-162)を分担執筆した。
3 図説 教養心理学 著者：金敷大之・森田泰介(編著)、中田英利子・山本晃輔	共著	2011年3月15日	ナカニシヤ出版	教養教育における教科書として位置づけられた心理学の著書である。章立て、図表の選定など、編者として中心的な役割を果たした。また、全15章のうち、第3章「学習」(pp. 27-36)、第5章「行為」(pp. 49-64)、第6章「知能」(pp. 65-78)、第8章「対人関係」(pp. 91-106)、第9章「道具と文化」(pp. 107-118)、第12章「無意識」(pp. 141-158)、第14章「神経系」(pp. 171-194)、第15章「心理学の研究について」(pp. 195-210)を分担執筆した。
4 認知心理学の冒険—認知心理学の視点から日常生活を捉える 著者：兵藤宗吉・野内類(編著)、浅野昭祐・井潤知美・大坪将・大宮宗一郎・金敷大之・熊田孝恒・下田僚・白井述・鈴木宏幸・須藤智・高野裕治・中嶋智史・中山友則・西中宏史・日比優子・緑川晶・森田泰介・山科満・山本晃輔	共著	2013年5月20日	ナカニシヤ出版	認知心理学の専門教育の教科書として位置づけられた心理学の著書である。全4章のうち、第4章「認知心理学と隣接領域との連携」における、第6節「よく考え抜かれた練習に伴う熟達」(pp. 230-247)を分担執筆した。
5 図説 教養心理学 (増補第2版) 著者：金敷大之・森田泰介(編著)、中田英利子・山本晃輔・富高智成・猪股健太郎	共著	2016年4月1日	ナカニシヤ出版	教養教育における教科書として位置づけられた心理学の著書である。前述『図説 教養心理学』増補第2版として、新たに章が追加され、既存の章に加筆修正が行われたものである。章立て、図表の選定など、編者として中心的な役割を果たした。また、全15章のうち、第3章「学習」(pp. 27-36)、第7章「行為」(pp. 77-92)、第8章「知能」(pp. 93-106)、第10章「対人関係」(pp. 119-134)、第12章「道具と文化」(pp. 145-156)、第13章「無意識」(pp. 157-174)、第15章「神経系」(pp. 187-210)、第16章「心理学の研究について」(pp. 211-226)を分担執筆した。
:				
(学術論文)				
1 行為事象の記憶における記銘形態の処理	単著	1999年3月31日	基礎心理学研究第17巻2号 79-84.	被験者実演課題(SPTs)の高い再生成績は、記銘形態(情報源)の体制化による影響であるかどうかを、自由再生およびソースモニタリング課題を用いて検討した。その結果、記銘形態の体制化は見られなかったが、SPTsの再生成績は対照条件の再生成績を上回り、被験者の運動行為によってSPTsの再生成績が高められていることが明らかとなった。

2 被験者実演課題における項目特定処理説の検討	単著	2000年3月31日	基礎心理学研究 第18巻2号 149-155.	SPTsの符号化を説明する理論として、項目特定処理説があげられる。本研究では、項目特定処理説の妥当性を、実験者呈示精緻化および自己生成精緻化の枠組みを用いて検討した。その結果、先行研究と同様、SPTsにおいては実験者呈示精緻化および自己生成精緻化の効果は見られず、項目特定処理説が妥当であることが明らかとなった。
3 行為事象の記憶における被験者の運動行為と言語的処理の効果	単著	2000年6月25日	心理学研究 第71巻2号 89-95.	本研究は、SPTsの符号化過程と実験者実演課題(EPTs)のそれとの差異を検討した。SPTsにおける被験者の運動行為が実際の記憶成績にどのような影響をもたらしているかを実験的に明らかにした。その結果、SPTsの符号化では、被験者の運動行為情報と言語的情報とが統合されていることが示唆された。
4 運動パターンの作動記憶—二重課題法における身体運動スパンと手指運動スパンの比較から— (著者：金敷大之・藤田哲也・齊藤智・加藤元一郎)	共著	2002年2月25日	心理学研究 第72巻6号 522-527.	本研究は、行為の作動記憶、特に運動パターンの作動記憶において、運動構成要素の処理が関与しているかどうかを、メモリスパン課題を用いて検討した。その結果、運動パターンの作動記憶では、言語的構成要素とは異なる運動固有の処理がなされていることが明らかとなった。 (金敷の担当箇所：実験材料の作成、実験の施行、論文の執筆)
5 被験者実演課題の記憶範囲に対する同時並行課題の影響	単著	2002年9月30日	基礎心理学研究 第21巻2号 1-10.	本研究は、論文「運動パターンの作動記憶—二重課題法における身体運動スパンと手指運動スパンの比較から」に基づいて、SPTsの符号化において、どのような構成要素の処理が関与しているかを二重課題法によって明らかにした。その結果、SPTsの符号化には、運動構成要素の処理のみが関与していることが明らかとなった。この結果は、SPTsの符号化に言語的構成要素および運動構成要素の処理が二重に関与するという、先行研究の結果とは食い違っている。本研究では、この結果の食い違いを説明するための論議を行った。
6 行為事象および被験者実演課題の記憶	単著	2002年12月10日	心理学評論 第45巻2号, 141-163.	本論は、これまでの行為事象記憶研究、SPTs研究の成果に基づいて、新たな理論の可能性を論考し、今後の研究の方向性を示した展望である。本論では、被験者の自己意識、特に記憶における自己認知的意識の重要性が示され、個体発達の観点から行為事象記憶およびSPTsの記憶を検討する必要が示唆された。
7 行為事象記憶の自由再生に関する観察—大学生および退職者女性を参加者として—	単著	2004年3月31日	教育科学セミナー(関西大学文学部教育学科) 第35巻, 55-68.	行為事象記憶について、大学生および退職者女性を実験参加者としての事例研究を行った。その結果、自由再生においては、退職者女性においてはありありと再現されている気づきを伴う想起が行われていることが明らかとなった。また、大学生においては、記憶の情報源に関して正確に判断して出力を行っていることが明らかとなった。
8 被験者実演課題の系列再生における新近性効果	単著	2004年12月1日	畿央大学紀要 第2号, 25-31.	本研究は、被験者実演課題の符号化における示差性の高さが、行為事象の系列再生成績を阻害しているのではないかという仮説のもとで、実験的検討を行った。その結果、被験者実演課題条件においては、新近性項目が系列再生時にふと思いつかんでしまうために、順序立てた再生が阻害されていることが明らかとなった。
9 日本版ESQ (Emotional Skills & Competence Questionnaire) の開発 著者：豊田弘司・森田泰介・金敷大之・清水益治	共著	2005年10月31日	奈良教育大学紀要 人文・社会科学 第54巻1号 43-47.	本研究は、人の情動を理解したり、みずからの情動を制御したりする技能についての、一般的な特性を測定する尺度を開発することを目的とした。その結果、情動の技能においては、他者の情動の理解、自己の情動の表出、自己の情動の制御という3因子が関与していることが明らかとなった。 (金敷の担当箇所：尺度項目の作成、外国語の翻訳、調査の施行、データの分析)
10 被験者実演課題の系列再生における新近性効果の検討(2)	単著	2005年12月1日	畿央大学紀要 第3号, 13-16.	本研究は、論文「被験者実演課題の系列再生における新近性効果」に引き続き、被験者実演課題の符号化における示差性の高さが、行為事象の系列再生成績を阻害しているのではないかという仮説のもとで、実験的検討を行った。符号化とは逆順の系列再生が行われた結果、被験者実演課題条件の再生成績は、他の条件よりも高く、行為事象の系列再生が困難であるのは、系列再生時に新近性項目がふと思いつかんでしまうためであることが明らかとなった。

<p>11 ゴミの分別に関する判断についての研究 著者：金敷大之・松本千絵美</p>	<p>共著</p>	<p>2006年12月1日</p>	<p>畿央大学紀要 第4号, 23-26.</p>	<p>学部生の授業「プロジェクト・ゼミ」における成果を論文にしたものである。ゴミの分別について、燃やすゴミ・燃やさないゴミの判断が、本来燃える・燃えないの判断にどの程度影響を受けているのかを明らかにした。その結果、被調査者が燃えると判断したものを、燃やすゴミであると判断してしまうバイアスが見られた。 (金敷の担当箇所：調査計画の立案、調査項目の選定、調査の実行、論文の執筆)</p>
<p>12 誘導尋問に対する回答選択肢呈示の効果 —グドジョンソン被暗示性尺度(GSS)の再検討—</p>	<p>単著</p>	<p>2007年3月31日</p>	<p>畿央大学紀要 第5号, 45-51.</p>	<p>グドジョンソン被暗示性尺度の選択肢の設計によって、誘導尋問に被験者が引っかかりやすくなるのかどうかを検討した。その結果、質問に対して被調査者に自由回答させた場合には、“知らない”・“そのような事態はなかった”などと選択肢が準備され被調査者に強制選択させた場合よりも、誘導尋問により引っかかりやすいという傾向が見られた。</p>
<p>13 畿央大学生の携帯電話利用に関する現状調査 著者：瓜野貴之・金敷大之</p>	<p>共著</p>	<p>2007年10月31日</p>	<p>畿央大学紀要 第6号, 51-58.</p>	<p>指導教官として当たった瓜野貴之の卒業論文を紀要論文としてまとめたものである。畿央大学の学部生が、さまざまなコミュニケーションを行う際に、対面、電話、メールのいずれを用いるかを選択させる調査を行った。その結果、何らかの謝罪を行う際に、男性は対面あるいは電話、女性はメールという男女差が明らかとなった。 (金敷の担当箇所：調査計画の立案の支援、分析の支援、論文執筆の指導、紀要論文執筆の指導)</p>
<p>14 色と色名との関係についての現状調査 —11肢強制選択による色見本の命名— 著者：金敷大之・福井将大・今井太一・栗林友和・中谷威登・高松靖光・辻本秀彰・池田由佳・岡本裕樹・白倉武</p>	<p>共著</p>	<p>2008年3月31日</p>	<p>畿央大学紀要 第7号, 31-38.</p>	<p>学部生の授業「プロジェクト・ゼミ」における成果を論文にしたものである。色見本を、色名カテゴリの11肢強制選択によって被調査者に分類させることで命名させる調査を行った。論文においては、その基礎データを掲載した。その結果、色カテゴリ間の境界は曖昧ではあるが、ほとんどすべての被調査者が特定の色名を選択するものもあり、特に暖色系において色名の典型色が見取れることが明らかとなった。 (金敷の担当箇所：調査計画の立案、調査項目の選定、調査の実行、論文の執筆)</p>
<p>15 行為事象記憶の自由再生と回想経験の検討</p>	<p>単著</p>	<p>2008年11月28日</p>	<p>畿央大学紀要 第8号, 15-20.</p>	<p>被験者実演課題の再生において、個々の項目の示差性の高さが、ありありと思ひ浮かぶ経験を伴う想起をもたらすという仮説を検証するための実験を行った。順向干渉パラダイムを用いて、被験者実演課題、実験者実演課題、および言語課題の再生成績および主観的回想経験を比較した。その結果、実験者実演課題および言語課題においては、順向干渉からの解放試行においてのみ回想経験を伴う再生が多くなるのに対して、被験者実演課題においてはそのような傾向は見られず、仮説が妥当であることが明らかとなった。</p>
<p>16 行為事象記憶の自由再生と回想経験の検討(2)</p>	<p>単著</p>	<p>2009年3月31日</p>	<p>畿央大学紀要 第9号, 43-47.</p>	<p>論文「行為事象記憶の自由再生と回想経験の検討」に引き続き、被験者実演課題の再生において、個々の項目の示差性の高さが、ありありと思ひ浮かぶ経験を伴う想起をもたらすという仮説を検証するための実験を行った。全3試行の累積再生課題を行い、被験者実演課題、実験者実演課題、および言語課題の再生成績および主観的回想経験を比較した。その結果、実験者実演課題および言語課題においては、回想経験を伴う再生が試行に連れて多くなるのに対して、被験者実演課題においては全試行ともに回想経験を伴う再生率が非常に高く、仮説が妥当であることが明らかとなった。</p>
<p>17 絵本の思い出 —大学生における物語の自伝的記憶についてのプロトコル研究— 著者：金敷大之・山本晃輔</p>	<p>共著</p>	<p>2009年11月30日</p>	<p>畿央大学紀要 第10号, 11-20.</p>	<p>大学生を被調査者として、子供の頃に読んで印象に残っている絵本の自伝的記憶について調査した。また、その絵本の筋書きやストーリーについてできるだけ正確に思い出すよう記述させた。その結果、保持期間10年以上を経過すると、ほとんど話は省略され、“〇〇な話”というように他者に説明する思い出し方をする傾向が高いことが明らかとなった。物語の要旨や世界観が、詳細な語句よりも保持されやすいという点で、先行研究を追認するものである。 (金敷の担当箇所：調査計画の立案、調査項目の選定、調査の実行、データの分析、論文の執筆)</p>

18 線画の反復呈示における言語ラベルの効果	単著	2010年10月31日	畿央大学紀要第12号, 41-44.	非言語材料である線画の反復再生を行う際に、言語ラベルが記憶の変容にどの程度影響を与えるかを明らかにする実験が行われた。その結果、言語ラベルなし条件では線画を囲む地の枠線を再現する傾向があるのに対して、言語ラベルあり条件では試行につれて枠線を再現しなくなる傾向が見て取れた。言語ラベルが枠線を省略し線画のみを描くよう方向づけていくことが明らかとなった。
19 絵本を手がかりとした幼少期における自伝的記憶の内容分析 著者：山本晃輔・金敷大之	共著	2010年3月31日	教育実践総合センター研究紀要（奈良教育大学）第19号, 47-51.	論文「絵本の思い出」に引き続き、幼少期の自伝的記憶の特徴を明らかにするために、絵本を手がかりとして想起される自伝的記憶についての調査を行った。その結果、絵本をめぐる経験エピソードについては、誰と一緒に読んだかなどの“人”を中心とした内容がもつとも多かった。また、10歳以上で読んだ絵本については、“場所”に関する内容が多かった。 (金敷の担当箇所：調査計画の立案、調査項目の選定、調査の実行、データの分析)
20 クイズ問題の再生における全体得点の予想—テストの繰り返しによる過小確信効果について—	単著	2011年3月31日	畿央大学紀要第13号, 37-41.	メタ記憶において、テストを繰り返しかえていくごとに自己評価が低く過小評価になる現象が知られている。本研究は、このテストの繰り返しによる過小評価が、実際にテストの繰り返しによるものかどうかを明らかにすることが目的であった。その結果、テストを繰り返しかえずだけで過小評価が生じることが明らかとなり、それは自己評価をする際に呈示されている情報について熟知しているためであると解釈された。
21 課題の繰り返し全体成績のメタ認知的予測に与える効果	単著	2012年3月31日	畿央大学紀要第9巻第1号, 23-28.	本研究は、論文「クイズ問題の再生における全体得点の予想」に引き続き、テスト課題の繰り返しに伴って、テスト成績の見積もりが過小評価になっていく現象のモニタリング過程を明らかにすることが目的であった。意味記憶における概念流暢性課題を用いて、その算出数を予測と実測を繰り返しかえた結果、第2試行以降に参加者は過小評価するようになり、参加者の課題経験に基づいて予測が行われる方向で判断基準が変化することが明らかとなった。
22 自己評定質問紙は課題成績の予測値を予測するか—方向感覚質問紙・認知的熟慮性—衝動性尺度およびメンタル・ローテーション課題間の相関研究—	単著	2013年3月31日	畿央大学紀要第10巻第1号, 1-6.	本研究は、遂行される当該の課題成績の予測値が、自己評定質問紙によって測定されるメタ認知的知識に基づいているかどうかを、相関研究によって明らかにすることが目的であった。調査における課題についてはメンタル・ローテーション課題が用いられ、自己評定質問紙については方向感覚質問紙および認知的熟慮性—衝動性尺度が用いられた。その結果、課題の実測得点および課題遂行の実測時間を自己評定質問紙によって予測することは可能だが、課題遂行前に見積もられた予測得点および実測時間を予測できなかった。
23 大学受験英単語—日本語450対の主観的熟知価—メタ記憶研究のために— 著者：金敷大之・山本晃輔	共著	2013年3月31日	畿央大学紀要第10巻第1号, 7-16.	メタ記憶の研究において、対連合学習パラダイムを用いて実験を行うための材料の標準化を行った。大学受験英単語と、その日本語訳である漢字二字熟語の組み合わせについて、大学生が熟知価を評定した。また、英語の得意不得意や、大学入試の形式との関係について分析を行った。その結果、英語が得意な学生ほど、熟知価を高く見積もる傾向があり、かつ大学入試において英語を選択して受験した学生は選択しなかった学生よりも熟知価を高く見積もる傾向があった。 (金敷の担当箇所：調査計画の立案、調査項目の選定、調査の実行、データの分析、論文の執筆)
24 記憶モニタリングにおける手がかり熟知性 プラス アクセス可能性について—概観—	単著	2013年12月31日	畿央大学紀要第10巻第3号, 5-14.	メタ記憶におけるモニタリングの過程について、文献展望を行ったものである。モニタリングにおいては、第1段階として、モニタリング判断時に呈示されている手がかりを熟知しているかどうかの認知過程があり、第2段階として、その手がかりから思い出すべきターゲットを検索できるかどうかの判断過程があるという。本論では、この2段階説(手がかり熟知性+アクセス可能性)に至るまでの研究史、実験手続き、適用できる範囲などを詳細に考察した。

<p>25 場所に対する感情についての探索的因子分析的検討—演習授業における研究報告—</p> <p>著者：金敷大之・森遥・山本悠太・溝嶋尚・坂谷千紘</p>	<p>共著</p>	<p>2014年6月31日</p>	<p>畿央大学紀要 第11巻1号, 39-44.</p>	<p>学部生の授業「社会心理学調査演習」における成果を論文にしたものである。場所の写真刺激441枚について、100の形容詞の観点から喚起される感情について評定調査を行った結果を探索的に因子分析した。その結果、5因子構造が見出され、そのうち4因子は、快—不快の次元、覚醒—睡眠の次元と対応していたが、残り1因子については親密性が関与する感情であることが明らかとなった。 (金敷の担当箇所：調査計画の立案、調査項目の選定、調査の実行、論文の執筆)</p>
<p>26 擬態語から色への連想についての研究—色相およびトーンへの連想—</p>	<p>単著</p>	<p>2016年3月18日</p>	<p>甲子園大学紀要 第43号, 101-103.</p>	<p>本研究は、擬態語（オノマトペ）から喚起される色のイメージの構造を明らかにすることが目的であった。40の擬態語から、色相12、およびトーン13を強制選択することを調査協力者に求め、それぞれを相関分析することによって構造を明らかにした。その結果、色相においては興奮—沈静、寒い—暖かい、の2次元が、トーンにおいては明度および彩度の2次元が見出された。</p>
<p>27 他者の動機づけを推論する際の手がかりについて</p>	<p>単著</p>	<p>2017年3月17日</p>	<p>甲子園大学紀要 第44号, 79-81.</p>	<p>本研究は、他者の動機づけを推論する際に、特に重視される手がかり情報を特定し、その分類を行うことであった。126名の調査協力者が、他者の動機づけを読み取る際の手がかり情報を、重視するかどうかの評定を行った。主成分分析を行った結果、観察者が直接観測できる手がかり情報の成分と、観察者が推論することで判断できる間接的な手がかり情報の成分とが見出された。</p>
<p>28 ながら歩き・歩きスマホに関する調査</p> <p>著者：金敷大之・南雄太郎</p>	<p>共著</p>	<p>2017年3月17日</p>	<p>甲子園大学紀要 第44号, 65-68.</p>	<p>本研究は、最近問題になっている、ながら歩き・歩きスマホの実態調査を行うことが目的であった。まず、阪急梅田駅のコンコースにおいて、ながら歩きの人数を数え上げる観察が行われた。その結果、ながら歩きを行う実数は朝のラッシュ時が多いのに対して、ながら歩きを行う人数の割合は夜が多いことが明らかとなった。次に、大学生を調査協力者とした、ながら歩きの実態調査が行われた。大学生288名が調査に回答した結果、45%の学生が、ほぼ毎日あるいは2-3日に1回程度の、ながら歩きを行っていることが明らかとなった。 (金敷の担当箇所：研究全体の企画立案、論文の執筆)</p>
<p>29 市民公開講座「もの忘れと上手につきあうコツ」の概要—日常生活のメタ記憶と受診意思決定との関連性—</p> <p>著者：上野大介・金敷大之・金網知征</p>	<p>共著</p>	<p>2017年3月17日</p>	<p>甲子園大学紀要 第44号, 69-72.</p>	<p>本論文は、平成28年3月、甲子園大学で実施された市民公開講座の報告書である。上野・金敷・金網が企画および実施したワークショップ「もの忘れと上手につきあうコツ」において、実施状況および受講生のインタビュー記録が記載されている。 (金敷の担当箇所：ワークショップの企画、ワークショップのファシリテーター)</p>
<p>30 日常生活のポジティブな出来事の想起の機能について</p>	<p>単著</p>	<p>2018年3月19日</p>	<p>甲子園大学紀要 第45号, 51-53.</p>	<p>本研究は、日常生活における「小さな幸せ」すなわちちょっとした幸運や出会いなどの想起における心理的機能を明らかにすることが目的であった。4年生大学生90名が調査協力者となり、ポジティブな出来事を箇条書きで記述した。出来事の記述数とストレス尺度とは無相関であったが、出来事の記述数と生きがい感尺度との間に正の相関が有意であった。現在の満足感の高い者が、ポジティブな出来事を思い出すことで満足度を再確認していると考えられる。</p>
<p>31 忘れ物・失くし物に関するメタ認知—物品に関連する記憶の自己評価—</p>	<p>単著</p>	<p>2019年3月19日</p>	<p>甲子園大学紀要 第46号, 9-12.</p>	<p>本研究は、日常生活における忘れ物・失くし物に特化した自己評価を分類・整理することが目的であった。大学生、社会人、高齢者251名が36項目の忘れ物・失くし物に関する質問紙に自己評定で回答した。因子分析の結果、作動記憶のエラー、コミッションエラー、持っていく／帰る物のエラー、落とし物・失くし物、不安・確認、食べ物・買い物エラー、メモのエラーの7因子が見出された。</p>
<p>：</p> <p>(その他：報告書)</p>				

1 自己についての素朴理論—他者知から自己知へ「想起的統合と分化」の手法による自己の構築過程について— 著者：野村幸正・金敷大之	共著	1998年3月10日	平成8年度～9年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））「自己についての素朴理論—他者知から自己知へ「想起的統合と分化」の手法による自己の構築過程について—（研究代表者：野村幸正，08610152）研究成果報告書	科学研究費補助金の研究協力者として、心理学を専攻する大学生および大学院生に繰り返しインタビューを行い、自己認知における観測の問題（3人称的観測か1人称的観測か）を論議した。（金敷の担当箇所：第2章「調査」および第3章「想起結果」，pp. 9-26.）
2 シンボリズムとしての内部観測について—シンボル操作としての観測と自問の研究方法論	単著	2007年3月31日	平成17年度～18年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「内部観測による自問自答型問題解決が行為的自己の構築に及ぼす効果に関する実証的研究」（研究代表者：野村幸正，17530492）研究成果報告書，pp. 39-53.	科学研究費補助金の研究分担者として、内部観測における研究の方法論を、シンボル操作の観点から理論的に考察した。
3 自問表現の形式を分類する調査研究 著者：金敷大之・井伊麻里	共著	2007年3月31日	平成17年度～18年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「内部観測による自問自答型問題解決が行為的自己の構築に及ぼす効果に関する実証的研究」（研究代表者：野村幸正，17530492）研究成果報告書，pp. 84-92.	科学研究費補助金の研究分担者として、研究協力者である井伊麻里とともに共同研究を行った結果の報告である。大学生363名を対象に、85文の自問を行う頻度の評定値に基づいて因子分析を行い、自問形式の分類・整理を行った。
4 情報レイアウト環境について	単著	2010年2月23日	平成19年度～21年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「想起抑制における意図—行為—表象の循環的機序に関する実証的研究」（研究代表者：野村幸正，19530604）研究成果報告書，pp. 47-64.	科学研究費補助金の研究分担者として、意図—行為—表象の循環が生じるための前提条件を理論的に考察した。さらに、循環が生じるための情報レイアウトの効果を、直接プライミングの手続きを用いて検討した。
(その他：査読なし論文)				
1 「いま」の自己の素朴理論—自己生成項目の評定値からの検討— 著者：白川雅之・金敷大之	共著	1999年3月31日	教育科学セミナー（関西大学文学部教育学科）第30号 35-44.	自分自身の性格や行動特性に関して、その人自身が抱いている素朴な因果関係のことを自己の素朴理論という。本研究では、自己の素朴理論の内実を明らかにした。調査では、自己の長所、および短所を被験者に自由記述させ、それらに対する過去の原因、およびそれらが原因となって生起する未来の予測を自由記述させた。そして、自己の長所および短所の記述と、原因帰属および未来予測の記述との関係を分析した。（金敷の担当箇所：調査の立案、調査項目の作成、調査の施行および分析）
2 再生時の視点による記銘情報の利用	単著	1999年3月13日	千里山文学論集（関西大学大学院文学研究科）第61号 71-80.	本研究は、修士論文の実験1を論文化したものである。本研究は、ある文章の検索時に、その文章の登場人物の視点に立って検索した場合と、文章を要約した場合とでは、その再生成績がどのように異なるかを検討した。
3 文章記憶における外的・内的視点の影響について	単著	1999年9月1日	千里山文学論集（関西大学大学院文学研究科）第62号 299-309.	本研究は、修士論文の実験2を論文化したものである。本研究は、文章における登場人物の視点で、記銘および検索を行った場合に、その再生成績がどのように異なるかを検討した。実験では、登場人物の視点について、登場人物を客観的にながめてイメージする視点と、登場人物の目から見た視野をイメージする視点とを操作した。
4 被験者実演課題における自己選択効果の検討	単著	2001年3月1日	千里山文学論集（関西大学大学院文学研究科）第65号 111-123.	本研究は、SPTsを説明する理論である、項目特定処理説の妥当性を、記憶の精緻化の観点から実験的に検討した。実験では、自己選択課題が用いられ、その再生成績と強制選択課題の再生成績とが比較された。
5 被験者実演課題における体制化の再検討	単著	2004年3月31日	千里山文学論集（関西大学大学院文学研究科）第71号 79-91.	本研究は、被験者実演課題の符号化において、体制化を促す関係処理は重要ではないという仮説を再検証することが目的であった。対象物の含まれる行為文、およびスクリプトに基づいた行為文を用いて、被験者実演課題における関係処理の役割について検討した。
(その他：学会発表)				

1 既存知識が再生成績に及ぼす影響について (口頭発表)	単独	1994年11月6日	関西心理学会 第106回大会 於 神戸女学院大学	本研究は、中央大学文学部に提出した卒業論文を学会発表したものである。本研究では、既存知識のありなしによって、その既存知識に関連する領域の再生成績に違いがみられるかどうかを実験的に検討された。
2 役割を与えての視点と再生 (ポスター発表)	単独	1995年10月11日	日本心理学会 第59回大会 於 沖縄コンベンション	本研究は、修士論文の実験1および論文「再生時の視点による記銘情報の利用」を学会発表したものである。
3 原因帰属・未来予測と個人内の法則性 (ポスター発表) (発表者：白川雅之・金敷大之)	共同	1995年11月12日	関西心理学会 第107回大会 於 大阪学院大学	本研究は、論文「「いま」の自己の素朴理論—自己生成項目の評定値からの検討」を学会発表したものである。 (金敷の担当箇所：調査の立案、調査項目の作成、調査の施行および分析)
4 文章記憶における外的・内的視点の影響について (ポスター発表)	単独	1996年9月12日	日本心理学会 第60回大会 於 立教大学	本研究は、修士論文の実験2および論文「文章記憶における外的・内的視点の影響について」を学会発表したものである。
5 SPTsは体制化されるか？ —偶発パラダイムを用いて— (ポスター発表)	単独	1996年11月3日	日本教育心理学会 第38回総会 於 筑波大学	本研究は、論文「行為事象の記憶における記銘形態の処理」を学会発表したものである。
6 行為事象の記憶における記銘経験の想起について (口頭発表)	単独	1996年12月15日	関西心理学会 第108回大会 於 京都女子大学	本研究は、論文「行為事象の記憶における被験者の運動行為と言語的処理の効果」の実験1を学会発表したものである。
7 行為事象の記憶における検索時の実演の効果について (ポスター発表)	単独	1997年9月17日	日本心理学会 第61回大会 於 関西学院大学	本研究は、論文「行為事象の記憶における被験者の運動行為と言語的処理の効果」の実験2を学会発表したものである。
8 行為事象の記憶における行為の理由の効果 (口頭発表)	単独	1997年11月9日	関西心理学会 第109回大会 於 奈良教育大学	本研究は、論文「被験者実演課題における項目特定処理説の検討」の実験1を学会発表したものである。
9 行為事象の記憶における行為の理由の自己生成 (口頭発表)	単独	1998年7月18日	日本教育心理学会 第40回総会 於 北海道教育大学函館	本研究は、論文「被験者実演課題における項目特定処理説の検討」の実験2を学会発表したものである。
10 行為による処理と模倣による処理の差異の検討 —自己選択パラダイムを用いて— (ポスター発表)	単独	1998年10月9日	日本心理学会 第62回大会 於 東京学芸大学	本研究は、論文「被験者実演課題における自己選択効果の検討」を学会発表したものである。
11 行為の作動記憶を探る —Body SpanとHand Spanの比較から— (口頭発表) (発表者：金敷大之・藤田哲也・齊藤智・加藤元一郎)	共同	1998年12月6日	関西心理学会 第110回大会 於 大阪教育大学	本研究は、論文「運動パターンの作動記憶—二重課題法における身体運動スパンと手指運動スパンの比較から—」の実験を学会発表したものである。 (金敷の担当箇所：実験材料の作成、実験の施行、学会発表論文集における原稿の作成、学会発表口頭発表者)
12 メモリスパン課題による行為事象記憶の検討 (ポスター発表)	単独	1999年8月25日	日本教育心理学会 第41回総会 於 甲南女子大学	本研究は、論文「被験者実演課題の記憶範囲に対する同時並行課題の影響」の予備実験を学会発表したものである。
13 行為の作動記憶を探るⅡ —構音抑制と運動抑制からの影響— (ポスター発表) (発表者：金敷大之・藤田哲也・齊藤智・加藤元一郎)	共同	1999年9月7日	日本心理学会 第63回大会 於 中京大学	本研究は、論文「運動パターンの作動記憶—二重課題法における身体運動スパンと手指運動スパンの比較から—」の実験を学会発表したものである。 (金敷の担当箇所：実験材料の作成、実験の施行、学会発表論文集における原稿の作成、学会発表ポスター発表者)
14 テスト予告による行為事象の記銘方略の検討 (ポスター発表)	単独	1999年10月11日	日本基礎心理学会 第18回大会 於 聖心女子大学	本研究は、SPTsの記銘時にテスト予告を行い、テスト予告の種類によって成績間の違いが見られるかどうかを検討したものである。
15 記憶に関する暗黙の理論(1) —想起成功経験と理由との関連づけから— (口頭発表) (発表者：金敷大之・有光興記)	共同	1999年11月7日	関西心理学会 第111回大会 於 神戸学院大学	人間の記憶に関する因果関係についての素朴な法則を、暗黙の理論という。本研究は、暗黙の理論の内実を明らかにするために、自由記述による調査で探索的検討を行ったものである。 (金敷の担当箇所：調査用質問紙の作成、調査の施行、学会発表論文集における原稿の作成、学会発表口頭発表者)
16 メモリスパン課題による行為事象記憶の検討Ⅱ —同時構音課題による干渉効果— (ポスター発表)	単独	2000年9月16日	日本教育心理学会 第42回総会 於 東京大学	本研究は、論文「被験者実演課題の記憶範囲に対する同時並行課題の影響」の実験1を学会発表したものである。
17 メモリスパン課題による行為事象記憶の検討Ⅲ —同時運動課題による干渉効果— (ポスター発表)	単独	2000年11月7日	日本心理学会 第64回大会 於 京都国際会館	本研究は、論文「被験者実演課題の記憶範囲に対する同時並行課題の影響」の実験2を学会発表したものである。
18 記憶に関する暗黙の理論(2) —想起失敗経験と理由との関連づけから— (口頭発表) (発表者：金敷大之・有光興記)	共同	2000年11月19日	関西心理学会 第112回大会 於 京都教育大学	本研究は、「記憶に関する暗黙の理論(1)」に引き続き、人間の記憶における暗黙の理論を、想起失敗の観点から調査したものである。 (金敷の担当箇所：調査用質問紙の作成、調査の施行、学会発表論文集における原稿の作成、学会発表口頭発表者)

19 メモリスパン課題による行為事象記憶の検討Ⅳ—同時視空間課題による干渉効果— (ポスター発表)	単独	2000年12月2日	日本基礎心理学会 第19回大会 於 立命館大学	本研究は、論文「被験者実演課題の記憶範囲に対する同時並行課題の影響」の実験3を学会発表したものである。
20 The effect of concurrent task on the memory span for action events. (ポスター発表)	単独	2001年7月19日	The 3rd International Conference on Memory. Palacio de Congresos, Valencia, Spain.	本研究は、論文「被験者実演課題の記憶範囲に対する同時並行課題の影響」の予備実験、および実験1～3において得られた結果を再解釈して、SPTsの符号化過程について論議を行ったものである。
21 系列再生課題による行為事象記憶の検討(1) (ポスター発表)	単独	2001年9月7日	日本教育心理学会 第43回総会 於 名古屋国際会議場	本研究は、学会発表「テスト予告による行為事象の記銘方略の検討」に基づいて、SPTsの検索過程を検討したものである。実験では、正順系列再生課題を用いて、SPTsにおいて無意図的な検索が行われているかどうかを検討された。
22 行為事象の記銘材料の標準化Ⅰ—評定方法による違い— (発表者：藤田哲也・金敷大之)	共同	2001年9月23日	日本基礎心理学会 第20回大会 於 関西学院大学	本研究は、SPTsの記銘材料を標準化するために、100個の材料に対する熟知値・記銘容易性・イメージ値・運動活動性について、被験者に評定させたものである。 (金敷の担当箇所：評定材料の作成、評定実験の施行、データの分析)
23 行為事象の記銘材料の標準化Ⅱ—再生成績による妥当性の検討— (ポスター発表) (発表者：金敷大之・藤田哲也)	共同	2001年9月23日	日本基礎心理学会 第20回大会 於 関西学院大学	本研究は、学会発表「行為事象の記銘材料の標準化Ⅰ」で作成された材料を用いて、SPTsにおける自由再生成績を測定したものである。 (金敷の担当箇所：実験材料の選定、実験の施行、データの分析、学会発表論文集における原稿の作成、学会発表ポスター発表者)
24 系列再生課題による行為事象記憶の検討(2)—逆順系列再生課題による検討— (ポスター発表)	単独	2001年11月7日	日本心理学会 第65回大会 於 つくば国際会議場	本研究は、学会発表「系列再生課題による行為事象記憶の検討(1)」に引き続き、SPTsの検索過程を検討したものである。実験では、逆順系列再生課題を用いて、SPTsにおいて無意図的な検索が行われているかどうかを検討された。
25 記憶に関する暗黙の理論(3)—因果図式の妥当性の検討— (口頭発表) (発表者：金敷大之・有光興記)	共同	2001年10月28日	関西心理学会 第113回大会 於 追手門学院大学	本研究は、学会発表「記憶に関する暗黙の理論(1)～(2)」で得られた結果に基づいて、暗黙の理論における因果図式の妥当性を検討した。 (金敷の担当箇所：調査用質問紙の作成、調査の施行、学会発表論文集における原稿の作成、学会発表口頭発表者)
26 “Pop-out” in serial recall by enactment: The effect of recency on the short-term serial memory for subject-performed tasks. (ポスター発表)	単独	2002年3月9日	The 3rd Tsukuba International Conference on Memory. Epochal Tsukuba Tsukuba International Congress Center, Tsukuba, Japan.	本研究は、学会発表「系列再生課題による行為事象記憶の検討(1)～(2)」で得られた結果を再解釈して、SPTsの検索過程について論議を行ったものである。
27 被験者実演課題(SPTs)における体制化の再検討(1)—対象物の含まれる行為文に基づいてパントマイムする場合— (ポスター発表)	単独	2002年9月27日	日本心理学会 第66回大会 於 広島大学	SPTsの符号化においては、体制化を促す関係処理が重要ではないと報告されている。本研究では、上述の報告の再検討を行い、SPTsの符号化における関係処理の役割について論議した。
28 被験者実演課題(SPTs)における体制化の再検討(2)—スクリプトに基づいた行為文を用いる場合— (ポスター発表)	単独	2002年10月13日	日本教育心理学会 第44回総会 於 熊本大学	学会発表「被験者実演課題(SPTs)における体制化の再検討(1)」に引き続き、SPTsの符号化における関係処理の役割について論議した。
29 行為事象の記銘材料の標準化Ⅲ—記銘材料の諸属性の妥当性の再検討— (ポスター発表) (発表者：藤田哲也・金敷大之)	共同	2002年11月17日	日本基礎心理学会 第21回大会 於 千葉大学	学会発表「行為事象の記銘材料の標準化Ⅰ～Ⅱ」に基づいて、記銘材料の再生成績を再分析したものである。 (金敷の担当箇所：実験材料の選定、実験の施行、データの分析)
30 行為事象の記銘材料の標準化Ⅳ—学習時の行為の実演の有無による検討— (ポスター発表) (発表者：金敷大之・藤田哲也)	共同	2002年11月17日	日本基礎心理学会 第21回大会 於 千葉大学	学会発表「行為事象の記銘材料の標準化Ⅰ～Ⅲ」に基づいて、被験者実演課題の再生成績と実験者実演課題のそれとを比較したものである。 (金敷の担当箇所：実験材料の選定、実験の施行、データの分析、学会発表論文集における原稿の作成、学会発表発表者)
31 記憶に関する暗黙の理論(4)—1人称的帰属と3人称的帰属との比較— (口頭発表) (発表者：金敷大之・有光興記)	共同	2002年12月1日	関西心理学会 第114大会 於 滋賀大学	学会発表「記憶に関する暗黙の理論(1)～(3)」に引き続き、想起の成功・失敗の原因帰属について、当事者(1人称的帰属)および傍観者(3人称的帰属)の違いを検討したものである。 (金敷の担当箇所：調査用質問紙の作成、調査の施行、学会発表論文集における原稿の作成、学会発表口頭発表者)

32 行為事象記憶の自由再生に関する予備的検討(3) —順向干渉パラダイムにおいて全試行を再生する場合のRemember / Know判断— (ポスター発表)	単独	2003年6月29日	日本認知心理学会第1回大会 於 日本大学	学会発表「行為事象記憶の自由再生に関する予備的検討(1)～(2)」に引き続き、順向干渉パラダイムにおいて全試行を再生する場合の再生成績の変化および主観的回想経験の観察を報告した。
33 行為事象記憶の自由再生に関する予備的検討(1) —順向干渉パラダイムを用いて— (ポスター発表)	単独	2003年8月24日	日本教育心理学会第45回総会 於 大阪国際会議場	行為事象記憶の事例研究として、順向干渉パラダイムを用いて再生成績の変化および主観的回想経験について観察を行ったものである。
34 行為事象記憶の自由再生に関する予備的検討(2) —順向干渉パラダイム、記銘材料の反復、Remember / Know判断— (ポスター発表)	単独	2003年9月14日	日本心理学会第67回大会 於 東京大学	学会発表「行為事象記憶の自由再生に関する予備的検討(1)」に引き続き、行為事象記憶の事例研究として、再生成績の変化および主観的回想経験について観察を行ったものである。
35 他者は何を記銘したのか—記憶リストの再構成におけるメタ情報および情報量の効果— (口頭発表)	単独	2003年10月19日	関西心理学会第115回大会 於 甲南女子大学	いくつかの単語を実験参加者に呈示し、他者の覚えた全体は何だったのかを推論させる課題において、どのような手がかりを用いたのかを検討したものである。
36 行為事象の記銘材料の標準化V —偶発学習による記銘材料の諸属性の妥当性の再検討— (ポスター発表) (発表者：藤田哲也・金敷大之)	共同	2003年10月31日	日本基礎心理学会第22回大会 於 つくば国際会議場	学会発表「行為事象の記銘材料の標準化I～IV」に引き続き、偶発学習における記銘材料の再生成績を、記銘材料の諸属性との関係で分析したものである。 (金敷の担当箇所：実験材料の選定、実験の施行、データの分析)
37 行為事象の記銘材料の標準化VI —偶発学習時の行為の実演の有無による検討— (ポスター発表) (発表者：金敷大之・藤田哲也)	共同	2003年10月31日	日本基礎心理学会第22回大会 於 つくば国際会議場	学会発表「行為事象の記銘材料の標準化I～V」に引き続き、被験者実演課題の再生成績と実験者実演課題のそれとを比較したものである。 (金敷の担当箇所：実験材料の選定、実験の施行、データの分析、学会発表論文集における原稿の作成、学会発表発表者)
38 自由回答は誘導尋問に引っかけやすい？ —被暗示性尺度の再検討— (ポスター発表)	単独	2004年5月8日	日本認知心理学会第2回大会 於 同志社大学	グドジョンソン被暗示性尺度の選択肢の設計によって、誘導尋問に被験者が引っかけやすくなるのかどうかを検討した。ここでは、自由回答および選択肢回答による成績の比較を行った。
39 行為事象記憶の自由再生に関する予備的検討(4) —退職者女性を対象とする観察— (ポスター発表)	単独	2004年9月12日	日本心理学会第68回大会 於 関西大学	学会発表「行為事象記憶の自由再生に関する予備的検討(1)～(3)」に引き続き、実験参加者を退職者女性として、再生成績の変化および主観的回想経験の変化を観察したものである。
40 行為事象記憶の自由再生に関する予備的検討(5) —退職者女性の全試行再生成績における成績— (ポスター発表)	単独	2004年10月9日	日本教育心理学会第46回総会 於 富山大学	学会発表「行為事象記憶の自由再生に関する予備的検討(1)～(4)」に引き続き、退職者女性の全試行再生について、再生成績の変化および主観的回想経験の変化を観察したものである。
41 ゲーム内行為の記憶 —親指立てゲームにおけるプレイヤーおよび観客の記憶について— (口頭発表)	単独	2004年10月24日	関西心理学会第116回大会 於 京都ノートルダム女子大学	親指立てゲームのプレイヤーの行為を、プレイヤー自身および観客に想起させるという課題を行った。プレイヤーの成績と観客の成績とが比較検討された。
42 行為事象の記銘材料の標準化VII —実演に基づく記銘材料の諸属性値と、実演による再生成績との関連— (ポスター発表) (発表者：藤田哲也・金敷大之)	共同	2004年11月26日	日本基礎心理学会第23回大会 於 朱鷺メッセ(新潟コンベンションセンター)	学会発表「行為事象の記銘材料の標準化I～VI」に基づいて、再生成績と材料属性との関連性を再分析したものである。 (金敷の担当箇所：実験材料の選定、実験の施行、データの分析)
43 行為事象の記銘材料の標準化VIII —観察および言語に基づく記銘材料の諸属性値と、実演による再生成績との関連— (ポスター発表) (発表者：金敷大之・藤田哲也)	共同	2004年11月26日	日本基礎心理学会第23回大会 於 朱鷺メッセ(新潟コンベンションセンター)	学会発表「行為事象の記銘材料の標準化I～VII」に引き続き、実験者実演課題の再生成績と材料属性との関連を再分析したものである。 (金敷の担当箇所：実験材料の選定、実験の施行、データの分析、学会発表論文集における原稿の作成、学会発表発表者)
44 誘導尋問に対する選択肢呈示の効果 —被暗示性尺度の再検討(2)— (ポスター発表)	単独	2005年5月29日	日本認知心理学会第3回大会 於 金沢大学	学会発表「自由回答は誘導尋問に引っかけやすい？」に引き続き、グドジョンソン被暗示性尺度における選択肢設計の効果について検討した。

45 行為事象記憶の自由再生と主観的回想経験の検討(1) (ポスター発表)	単独	2005年9月12日	日本心理学会第69回大会 於 慶應義塾大学	順向干渉パラダイムを用いて、被験者実演課題における主観的回想経験の成績変化を検討したものである。被験者実演課題において、主観的な回想経験は、項目の示差性が影響していることを明らかにしようとした。
46 空間のデザインに投影された望ましい対人関係について —ルーム・シェアリング・タスク— (口頭発表)	単独	2005年11月19日	関西心理学会第117回大会 於 関西福祉科学大学	ルーム・シェアリング・タスクという投影法課題を用いて、対人関係のあり方を明らかにしようとした。望ましい—望ましくないの観点から、被調査者に部屋のデザインを行ってもらい、その層を分析した。
47 ゴミの分別に関する判断の研究 (ポスター発表)	単独	2005年12月3日	日本基礎心理学会第24回大会 於 立教大学	燃やすゴミ—燃やさないゴミの判断が、本来燃える—燃えないの判断にどの程度影響を受けているのかを明らかにするために行われた。燃やす—燃やさないのルールは、三重県名張市のルールを用いた。
48 誘導尋問に対する選択肢呈示の効果 —被暗示性尺度の再検討(3)— (ポスター発表)	単独	2006年8月1日	日本認知心理学会第4回大会 於 中京大学	学会発表「自由回答は誘導尋問に引っかかりやすい？」に引き続き、グドジョンソン被暗示性尺度における選択肢設計の効果について検討した。
49 自問自答型問題解決における自問の形式 —自問を分類するための枠組みの探索— (ポスター発表) (発表者：金敷大之・森田泰介・野村幸正)	共同	2006年11月3日	日本心理学会第70回大会 於 福岡国際会議場	自問自答をする際に、自問の質問形式を文法や命題として分類することで、自問のタイプを分析しようとした。その調査研究および因子分析の結果が報告された。 (金敷の担当箇所：調査項目の選定、調査の施行、データの分析、学会発表論文集における原稿の作成、学会発表発表者)
50 空間のデザインに投影された望ましい対人関係について2 —ルーム・シェアリング・タスクにおける可視性分析— (口頭発表)	単独	2006年11月19日	関西心理学会第118回大会 於 帝塚山大学	学会発表「空間のデザインに投影された望ましい対人関係について」に引き続き、ルーム・シェアリング・タスクにおける投影法の調査結果を報告した。
51 色と色名との関係についての調査(1) (ポスター発表)	単独	2007年5月26日	日本認知心理学会第5回大会 於 京都大学	色と色名との関係について、一定の傾向を見出そうとするものであった。色の概念名に相当する11色名を選択肢として、カラーサンプルを選択によって命名させる調査を行った。
52 実在についての自問の頻度について —正答の出しようのない問題をどの程度考えてしまうか— (ポスター発表)	単独	2007年9月19日	日本心理学会第71回大会 於 東洋大学	学会発表「自問自答型問題解決における自問の形式」に引き続き、正答の出しようのない自問について、どの程度考えてしまうのかの頻度を調査研究した。
53 個数を数える(1) —数え切れない数を“いっぱい”という1語名に写像するのはどれくらいの量以上か— (口頭発表)	単独	2007年11月18日	関西心理学会第119回大会 於 関西大学	個数を“いっぱい”と表現してしまうのは、どのくらいの量以上かを明らかにしようとした。実験参加者に、スクリーン上に散らばる点を呈示し、個数を表現させる方法によって実験が行われた。
54 色と色名との関係についての調査(2) —11肢強制選択による色見本の命名— (ポスター発表)	単独	2008年5月31日	日本認知心理学会第6回大会 於 千葉大学	学会発表「色と色名との関係についての調査(1)」に引き続き、色の概念名に相当する11色名を選択肢として、カラーサンプルを選択によって命名させる調査を行った。
55 理想の部屋に関する研究(1) —平面に投影された空間の解析指標について— (ポスター発表) (発表者：金敷大之・山本晃輔)	共同	2008年9月19日	日本心理学会第72回大会 於 北海道大学	学会発表「空間のデザインに投影された望ましい対人関係について1—2」に引き続き、投影法によって理想の部屋を被調査者に描いてもらい、その結果を解析する方法を検討した。 (金敷の担当箇所：調査の設計、調査の施行、データの分析、学会発表論文集における原稿の作成、学会発表発表者)
56 類似度評定に対する前面情報および包囲情報の効果の違いについて (口頭発表)	単独	2008年11月9日	関西心理学会第120回大会 於 奈良女子大学	参加者の前面にのみ呈示された情報と、参加者を包囲する情報とでは、記憶成績および類似度評定値に違いが見られるかどうかを実験的に検討した。
57 色と色名との関係についての調査(3) —色名の自由記述の方略について— (ポスター発表)	単独	2009年7月19日	日本認知心理学会第7回大会 於 立教大学	学会発表「色と色名との関係についての調査(1)—(2)」に引き続き、色と色名との関係についての調査を行った。カラーサンプルを自由に命名する調査結果の報告を行った。
58 理想の部屋に関する研究(2) —投影された空間の可視性とBig Five尺度との関連— (ポスター発表)	単独	2009年8月26日	日本心理学会第73回大会 於 立命館大学	学会発表「理想の部屋に関する研究(1)」に引き続き、投影法によって理想の部屋を被調査者に描いてもらい、その結果を解析する方法を検討した。さらに、その指標と性格特性尺度の得点との相関を明らかにした。
59 類似度評定に対する前面情報および包囲情報の効果の違いについて(2) (口頭発表)	単独	2009年11月15日	関西心理学会第121回大会 於 大阪人間科学大学	学会発表「類似度評定に対する前面情報および包囲情報の効果の違いについて(1)」に引き続き、参加者の前面にのみ呈示された情報と、参加者を包囲する情報とでは、記憶成績および類似度評定値に違いが見られるかどうかを実験的に検討した。

60 線画の反復再生における言語ラベルの効果 (ポスター発表)	単独	2010年5月30日	日本認知心理学会第8回大会 於 西南学院大学	記憶の変容を測定するために、曖昧な線画を呈示し、反復再生課題を参加者に求めた。その際、言語ラベルを呈示する条件と呈示しない条件とで、変容の程度が異なるかを検討した。
61 同時呈示された情報における直接プライミング効果について (ポスター発表) (発表者：金敷大之・水本遼太郎)	共同	2010年9月20日	日本心理学会第74回大会 於 大阪大学	情報のレイアウト効果を明らかにするために、同時呈示された情報について、直接プライミング効果を明らかにした。その際、学習時とテスト時における縦書き・横書きの違いの効果、フォントの違いの効果が検討された。 (金敷の担当箇所：実験の設計、実験の施行、学会発表論文集における原稿の作成、学会発表発表者)
62 クイズ問題の再生における全体得点の予測—テストの繰り返しによる過小確信効果— (口頭発表)	単独	2010年11月7日	関西心理学会第122回大会 於 兵庫医療大学	40問のクイズ問題について、参加者に全体の得点を予測させ、実際の正答得点との比較を行った。また、テストを繰り返した際に、予測が過小評価に変化するかどうかを検討した。
63 ボール投げ課題におけるメタ認知過程についての事例研究 (ポスター発表)	単独	2011年5月29日	日本認知心理学会第9回大会 於 学習院大学	ボール投げ課題の事例研究を行い、参加者の成功数と、参加者の予測した成功数との比較を事例研究として行った。また、試行を繰り返していくことで、参加者の自己認識やメタ認知に変化が見られるかどうかを明らかにしようとした。
64 Underconfidence with test on aggregate-item metamemory. (ポスター発表)	単独	2011年8月4日	The 5th International Conference On Memory (ICOM5) University of York: York, England.	学会発表「クイズ問題の再生における全体得点の予測」に基づいて、再分析を行った結果を、国際学会において発表した。
65 テストの繰り返しによる全体得点の過小確信効果(2) (ポスター発表)	単独	2011年9月15日	日本心理学会第75回大会 於 日本大学	学会発表「クイズ問題の再生における全体得点の予測」に引き続き、クイズ問題について、参加者に全体の得点を予測させ、実際の正答得点との比較を行った。また、テストを繰り返した際に、予測が過小評価に変化するかどうかを検討した。
66 テストの繰り返しが全体成績の予測に与える効果(3) (口頭発表)	単独	2011年11月6日	関西心理学会第123回大会 於 京都学園大学	学会発表「クイズ問題の再生における全体得点の予測」に引き続き、クイズ問題について、参加者に全体の得点を予測させ、実際の正答得点との比較を行った。また、テストを繰り返した際に、予測が過小評価に変化するこの規定因について検討した。
67 空間の記憶における符号化特定性について (ポスター発表)	単独	2012年6月2日	日本認知心理学会第10回大会 於 岡山大学	人の身体よりも大きい空間の記憶についても、符号化特定性効果が見られるのかどうかを明らかにするために、実際の大空間を歩いてたどる課題について、符号化時とテスト時との呈示方法の違いの効果について検討した。
68 自己評定質問紙は課題成績の予測値を予測するか—方向感覚質問紙・認知的熟慮性—衝動性尺度およびメンタル・ローテーション課題間の相関研究— (ポスター発表)	単独	2012年9月11日	日本心理学会第76回大会 於 専修大学	一般的な自己評定を測定する質問紙と、実際の課題成績、および課題成績の予測との間に、相関関係が見られるのかどうかを明らかにするために調査を行った。方向感覚質問紙、認知的熟慮性—衝動性尺度の自己評定と、メンタル・ローテーション課題の成績および予測値との相関係数を分析した。
69 処理水準効果と手がかり再生の見積もりについて (口頭発表)	単独	2012年10月28日	関西心理学会第124回大会 於 滋賀県立大学	再生成績を規定する処理水準の方向づけ課題について、実験参加者は再生成績を正確に予測できるのかどうかを、手がかり再生課題を用いて検討した。
70 大学受験英単語—日本語450対の主観的熟知価—メタ記憶研究のために— (ポスター発表) (発表者：金敷大之・山本晃輔)	共同	2013年6月29日	日本認知心理学会第11回大会 於 筑波国際会議場	大学受験用の英単語と、日本語訳としての漢字2字熟語との組み合わせについて、主観的熟知価の評定調査を行った。 (金敷の担当箇所：調査の設計、調査の施行、データの分析、学会発表論文集における原稿の作成、学会発表発表者)
71 大学受験英単語の間接テストにおけるメタ記憶—手がかり熟知性仮説の検証(1)— (ポスター発表) (発表者：金敷大之・山本晃輔)	共同	2013年8月19日	日本教育心理学会第55回総会 於 法政大学	大学受験英単語—日本語対を材料に用いて、記憶テストの成績と、記憶テストの予測との相関関係を明らかにした。 (金敷の担当箇所：実験の設計、実験の施行、データの分析、学会発表論文集における原稿の作成、学会発表発表者)
72 大学受験英単語の間接テストにおけるメタ記憶—手がかり熟知性仮説の検証(2)— (ポスター発表) (発表者：金敷大之・山本晃輔)	共同	2013年9月20日	日本心理学会第77回大会 於 札幌コンベンションセンター	学会発表「大学受験英単語の間接テストにおけるメタ記憶」に引き続き、大学受験英単語—日本語対を材料に用いて、記憶テストの成績と、記憶テストの予測との相関関係を明らかにした。 (金敷の担当箇所：実験の設計、実験の施行、データの分析、学会発表論文集における原稿の作成、学会発表発表者)

73 既学習判断に及ぼす材料熟知価および材料呈示時間の効果 — 既存知識としての熟知性と実験操作としての熟知性の交互作用— (口頭発表)	単独	2013年11月3日	関西心理学会第125回大会 於 和歌山大学	学会発表「大学受験英単語の間接テストにおけるメタ記憶」に引き続き、大学受験英単語—日本語対を材料に用いて、記憶テストの成績と、記憶テストの予測との相関関係を明らかにした。その際、呈示時間が短い場合と、長い場合とで、相関関係が異なるかどうかを検討した。
74 既学習判断に及ぼすブライミングおよび判断時正答呈示の効果 (ポスター発表)	単独	2014年9月11日	日本心理学会第78回大会 於 同志社大学	メタ記憶のモニタリングにおける既学習判断(JOL)において、手がかりが先行呈示されていることによって過大評価が生じるのかどうかを、大学受験英単語—日本語対を用いて検討した。
75 既学習判断に及ぼすブライミング効果の検討—エピソード的な情報の場合— (口頭発表)	単独	2014年11月9日	関西心理学会第126回大会 於 大阪市立大学	メタ記憶のモニタリングにおける既学習判断(JOL)について、学習前に情報を先行呈示することによって、ブライミング効果が生じるのかどうかを、意味的に関連のある対連合ではなく恣意的な対連合を用い、エピソード記憶課題において検討した。
76 擬態語から色への連想についての研究—色相およびトーンへの連想— (ポスター発表)	単独	2015年9月22日	日本心理学会第79回大会 於 名古屋国際会議場	本研究は、論文「擬態語から色への連想についての研究—色相およびトーンへの連想—」を学会発表したものである。
77 他者の動機づけを推論する際の手がかりについて (口頭発表)	単独	2015年11月8日	関西心理学会第127回大会 於 関西学院大学	若年労働者は、先輩から「やる気ある?」と言われるのを嫌う傾向がある。人は、他者の動機づけの高さを推論する際に、どのような手がかりを使っているのだろうか。本研究は、探索的に検討した。その結果、観察者が直接経験していない間接的な手がかり情報と、観察者が知覚・経験した直接的な手がかり情報とがありうる事が明らかとなった。
78 日常生活のポジティブな出来事の想起の機能について—想起数を指標とした分析— (口頭発表)	単独	2016年11月3日	関西心理学会第128回大会 於 京都大学	本研究は、日常生活のポジティブな出来事、すなわち“小さな幸せ”を想起することの精神的健康に与える影響を明らかにすることが目的であった。91名の被調査者が、想起できる限り“小さな幸せ”を箇条書きし、生きがい感尺度および日常生活ストレス尺度に回答した。その結果、“小さな幸せ”の想起数は、生きがい感尺度の各因子と有意な正の相関を示したが、日常生活ストレス尺度の各因子とは有意な相関を示さなかった。
79 忘れ物・失くし物に関する自己評価—物品に関連する記憶に特化して— (口頭発表)	単独	2017年11月5日	関西心理学会第129回大会 於 京都橘大学	本研究は、日常生活における忘れ物・失くし物に特化した自己評価を分類・整理することが目的であった。大学生、社会人、高齢者251名が36項目の忘れ物・失くし物に関する質問紙に自己評定で回答した。因子分析の結果、作動記憶のエラー、コミッションエラー、持っていく/帰る物のエラー、落とし物・失くし物、不安・確認、食べ物・買い物エラー、メモのエラーの7因子が見出された。
80 促進予防焦点と自尊感情との関係について (口頭発表)	単独	2018年10月28日	関西心理学会第130回大会 於 甲南大学	本研究は、促進予防焦点尺度と自尊感情尺度との相関関係を明らかにすることが目的であった。127名の大学生・大学生が促進予防焦点尺度、ローカス・オブ・コントロール尺度、自尊感情尺度、個人志向性・社会志向性尺度に回答した。その結果、促進予防焦点尺度の利得接近志向と自尊感情とは有意な正の相関、促進予防焦点尺度の損失回避志向と自尊感情とは有意な負の相関が見られた。
81 高齢者の社会的適応における選択最適化補償理論(SOC理論)についての研究—自己効力感および自尊感情に与える影響— (口頭発表) (発表者: ○真野佑実子・金敷大之・金網知征・藤田綾子)	共同	2018年10月28日	関西心理学会第130回大会 於 甲南大学	本研究は、選択最適化補償(SOC)の実践を行っている高齢者と、行っていない高齢者とで、適応についての違いが見られるかを明らかにすることが目的であった。107名の大阪府高齢者大学校在学の高齢者がSOC質問票、自尊感情尺度、自己効力感尺度に回答した。その結果、最適化に関する質問において、実践している者と実践していない者として自尊感情や自己効力感が異なることが明らかとなった。 (金敷の担当箇所: 研究データの分析指針の指導、論文執筆の指導)

(注)

- この書類は、学長(高等専門学校にあっては校長)及び専任教員について作成すること。
- 医科大学又は医学若しくは歯学に関する学部若しくは学部の学科の設置の認可を受けようとする場合、附属病院の長についてもこの書類を作成すること。
- 「研究業績等に関する事項」には、書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。
- 「氏名」は、本人が自署すること。
- 印影は、印鑑登録をしている印章により押印すること。ただし、やむを得ない事由があるときは、省略することができる。この場合において、「氏名」は、旅券にした署名と同じ文字及び書体で自署すること。